



# 震災を聞く

水本浩典教授ゼミ

神戸学院大・水本浩典教授ゼミの学生らが、阪神・淡路大震災の被災者の方々を対象に、震災当時の体験について聞き取り調査を行った。数多くの生の声を通し、震災のリアルに触れた彼らは何を思うのか。話を聞いた。

1月16日、神戸市立地域人材支援センターの一室。そこで自らの体験を切々と語る被災者と、真剣な眼差しで向き合う学生たち。「地域との信頼関係の中で学生は成長する」という水本浩典教授の方針の下、彼らは神戸市長田区民の人々と交流しながら学習してきた。今回の調査もその一環だ。

# 「震災のイメージ膨らんだ」

ゼミ生の田所明子さん（神戸学院大修士課程）は、当時小学校の校長を務めていた方の話を聞いた。被災者を避難所に割り振る作業が辛かったというエピソードを耳にし、比較的被害の少なかった尼崎市出身の彼女は「写真でしか見たことのない震災へのイメージが膨らんだ」という。

また、もともと震災に興味があったこのゼミを選んだのではなかった。被災者を避難所に割り振る作業が辛かったというエピソードを耳にし、比較的被害の少なかった尼崎市出身の彼女は「写真でしか見たことのない震災へのイメージが膨らんだ」という。



## 水本浩典教授ゼミ

トイレの文化史的考察で有名な水本教授のゼミ。このゼミでは歴史学について研究し、学生が中心となって2002年から「震災の体験を風化させず後世に継承する」活動を行っている。

い学生も多い。逢坂直人さん（神戸学院大・3年）もその一人だ。しかし、「被災者の方々の話を親身になって聞くうちに気持ちを察し、人間的に成長できた」と充実した様子で語る。

一方、「このような場を設けても、市民の生の声を拾い上げるのは難しい」と漏らしたのは町田愛望（まなみ）さん（神戸学院大・4年）。協力者は市民団体や公的な立場に身を置く場合が多く、そうした方々も自分の家族などについての個人的経験はなかなか語ることができないそうだ。「遺族の方の悲しみを察すると、聞く側のこちらも身構えてしまう」と悩む彼女だったが、一方で「地域とのつながりがないとできない体験」と、その貴重さを確認していた。

人々の記憶はだれかが語り継がねば後世へ残らない。彼らはその思いを胸に、静かに耳を傾け続けていた。水本教授はこの活動は、今後も続けていくという。

# UNN 関西学生報道連盟

## FOCUSは

神戸大学ニュースネット委員会  
同志社大学 PRESS 編集部  
NEWS 立命通信社  
関学新月通信社  
大阪大学 POST 編集部

関西大学タイムス編集部  
神戸学院大学 K.C.Press 編集部  
京都女子大学藤花通信編集部  
京都大学 EXPRESS 編集部

の共同編集による週刊フリーペーパーです